

ヤマハが取り組む音楽を通じた街づくり（おとまち）

（株）ヤマハミュージックジャパン
事業企画部事業開発課 主任 細田幸子

1. 音楽を通じた街づくり（おとまち）とは

株式会社ヤマハミュージックジャパンが展開する、ヤマハ音楽の街づくり事業こと「おとまち」は、1887年の親会社のヤマハ株式会社創業以来、130年以上の歴史の中で培ったさまざまなノウハウやリソースを元に、音楽が持つ“人と人をつなげる力”を活用し、自治体や企業・団体と社会の共有価値の創出を行っている。

「おとまち」の事業内容は、コンサートホールの活用や、屋内外でのイベントやワークショップの提案、地域の音楽資源を活用した街づくりを行う、“音楽を通して地域の価値を高めるコンサルティングやイベントプロデュース”である。

たとえば、「おとまち」に寄せられる相談には以下のような内容が多い。

- 「街の変化に合わせた市民参加型のイベントを開きたい」
- 「地域に立派なホールや施設があるけど、なかなか利用されない」
- 「地域の企業として、地域文化の発展に貢献したい」

自治体、企業などの抱える課題の根本には、その土地で新しい取り組みを生み出すキーパーソンとなる人材の不足や、地域で活動したいという想いを持った人同士がつながる機会が少ないことが挙げられることが多い。そこに「おとまち」は着目し、音楽を使って地域を元気にする新たなコミュニティ創りや、人材育成を行ってきた。

2009年に「おとまち」を新規事業として立ち上げたものの、それから3年ほど大きな進展はなかった。大きなターニングポイントになったのは、2011年の東日本大震災だった。この震災をきっかけに多くの方の意識が変わり、地域社会でのコミュニティが求められ、重視されるようになったことで、多数の問い合わせや相談が寄せられるようになった。



ヤマハおとまちのロゴ

この意識変革の流れは企業文脈においても通じる部分が多く、かつては株主・投資家に対する価値は実利的な配当が中心とされてきたが、昨今は ESG 投資といった言葉も普及し、従来の財務情報だけでなく、環境 (Environment)・社会 (Social)・ガバナンス (Governance) 要素も考慮した投資価値も重要視されつつある。

全世界に瞬く間に広がった未曾有のパンデミックをはじめ、今後も起こりうる自然災害や、少子高齢社会、貧困格差といった社会課題が日本でより深刻化することにも備え、変化し続ける時代に音楽が果たせる役割を改めて考える必要がある。

今回は「おとまち」の事例を紹介しつつ、大テーマである「音楽による社会貢献」について、地域コミュニティづくりの観点から考えていく。

2. 事例1：千葉県柏市・ドラムサークルファシリテーター育成講座

まず初めに、2016 年から千葉県柏市の社会福祉協議会と協働で行われている「ドラムサークルファシリテーター育成講座」を紹介する。

クライアント (=千葉県柏市社会福祉協議会) の抱える課題：

- ・超高齢社会の新たな解決策として「市民の力」の活用
- ・地域住民同士の人のつながり醸成
- ・職場や町内会でリーダーシップをとれる人材発掘・育成

おとまちの提案：

- ・地域福祉に音楽によるイノベーションを起こすスペシャリスト育成
- ・地域のつながりを創出する「ドラムサークルファシリテーター育成講座」の実施
- ・自立した市民団体の活動を目指し、講座以降の運営を設計・サポート

“ドラムサークル”とは、打楽器を持った参加者が輪になって即興で作りあげていくアンサンブルのことだ。年齢や楽器経験問わず、子どもから大人まで気軽に参加でき、相手のリズムを感じて呼吸を合わせ合わせていくことで、場の一体感が醸成されていく。アメリカで生まれたこの取り組みは日本各地で展開されているが、そのファシリテーターを行政が中心となり、「地域福祉の新たな担い手」として一般市民の中から育てようという試みは全国でも初めてのことだった。

このプロジェクトにおけるキーパーソンである、柏市社会福祉協議会 地域福祉課 課長・社会福祉士の^{ふみなり}高橋史成さんは、「おとまち」との協業するに至った柏市の抱える課題についてこのように語っている。

「東京近郊のベッドタウンともいえる柏市は急速な高齢化が進み、町会加入率は減少。かつてのよ

うな街の人のつながりが希薄化し、孤立化の問題などもあり、街の機能が著しく低下していました。もし大規模な災害があったら……と考えると、このままではいけない。社会福祉協議会は街の人をつなげ、地域をつくるのが仕事です。ですが、その仕組みをつくり、普及していくにも相当な時間を要します。しかも現在の社会は、お互いにバリアを張るような時代。従来のやり方には限界を感じていたんです。」

「おとまち」は、このような柏市の抱える課題に対して、地域福祉の新たな担い手をドラムサークルのファシリテーターを発掘・育成するための講座を立ち上げることで応えていった。

まず4年間講座を実施し、柏市民から毎年ドラムサークルファシリテーターを育成する。そして講座修了生たちが自主的な活動でドラムサークルの輪を広げていくセカンドステージ、最終形は市民が中心となる“元気な柏市の地域コミュニティ”が完成し、広がるビジョンを描いた。



かしわドラムサークルファシリテーター育成講座の様子

講座は半年間で全12回に決定。対象は柏市在住・在勤で18歳以上の方と広く募集をした結果、障がい者施設で働く20代職員から地元で子供たちにサッカーを教えている70代男性、街づくりに興味のある女子学生など、さまざまな職種、経歴を持つ個性豊かな25名が記念すべき第1期生として誕生した。

ドラムサークルの持つ魅力について前述の柏市社会福祉協議会・高橋さんは、こう語る。

「初めてドラムサークルを体験したときに、これだ！これなら限界を越えられる！とビビッときました。高齢者や障がい者、お子さんも若者もあらゆる人がドラムサークルで出会い、つながっていく。非常によい取り組みになったと思っています。誰でも瞬間的に楽しめて、参加したみなさんとの一体感を感じる。ほんとうに楽しいんです。だからこそ、この楽しさは人から人に伝えていったほうが広まるし活動も持続するだろうとは思っていたものの、こんなに広がるとは……。でも、これが理想形ですよ。いまでは市の行事にもお呼びがかかるほどです。」

この高橋さんの言葉からも汲み取れる通り、音楽を通じた街づくり・人材育成の魅力のひとつは、難しい説明を置いて、世代・性別・話す言語などの心理的ハードルを越えて“楽しく”人と人とがつながることが可能な点である。

当初、ドラムサークルの輪が広がるまでに約3年は必要だろうと想定していたが、第1期生たちは修了後すぐに2017年に「Drum Circle-Beat@Kashiwa (以下 DCBK)」という名称のドラムサークルの市民団体を立ち上げ、継続的な自主活動をスタートさせることとなった。現在4期を迎えた講座からは、約70名の市民ファシリテーターが生まれ、DCBKの活動を通じて、年間約4,000人の柏市民がこの取り組みに参加するほどに成長している。まさに地域コミュニティの希薄化や社会福祉を音楽で解決するスペシャリストたちを発掘、育成するプロジェクトとなった。

DCBKのドラムサークル活動実績：

2017年：活動回数および場所（市内75か所）市民参加数（2,547人）

2018年：活動回数および場所（市内140か所）市民参加数（3,607人）

2019年：活動回数および場所（市内116か所）市民参加数（4,045人）

3. 事例2：東京都渋谷区・みんなでつくる街の音楽祭「渋谷ズンチャカ！」

続いて、2014年から渋谷区の地元商店会、渋谷区と協働で行われている“みんなでつくる街の音楽祭・渋谷ズンチャカ！”を紹介する。

クライアント（＝地元商店会／渋谷区）の抱える課題：

- ・未来に向けて再開発が進む渋谷の街の活性化
- ・渋谷に暮らす人と訪れる人がゆるやかにつながる地域コミュニティの創成
- ・“シビックプライド”を持つ街づくりの担い手育成

おとまちの提案：

- ・渋谷の街を創る“人を育てる”参加型音楽祭の実施
- ・渋谷区・商店会・NPO・ボランティアをつなぐプロジェクトチームの立上げ
- ・年間プロジェクト策定と地域コミュニティの継続的育成

「渋谷ズンチャカ！」では、音楽ジャンル、世代、国籍、性別は不問、演奏ができなくても手ぶらで誰もが楽しめる公募の音楽ステージやセッション・ワークショップが開かれる。この“1日だけの音楽解放区”のために年間を通じて、高校生から50代まで、親子以上ともいえる幅広い世代の有志ボランティア“チーム・ズンチャカ！”と渋谷駅・原宿駅周辺の商店会、渋谷区、企業、地元NPOなどが一体となって、自分たちの手でつくりあげていく。

このプロジェクトの背景には、100年に一度とも言われる渋谷駅周辺における大再開発がある。駅周辺において10年以上の長期にわたる工事状態が続くなか、このような街の大きな変革時期において、地元商店会や渋谷区は、変わりゆく街の未来を、渋谷区に住む住民はもちろん、交流人口と呼ばれる渋谷区に遊びに来る人・働きに来る人達にもポジティブに捉え、“自分ごと”として考えてもら

えるような取り組みが必要だ、という想いを抱えていた。

そんななか、2013年に桑原敏武前渋谷区長から、渋谷駅周辺の再開発の地権者の1企業であったヤマハに相談があったことが、この音楽祭立ち上げのきっかけとなった。

渋谷区からの相談に対して、「おとまち」は、音楽祭本番の当日だけでなく、その準備プロセスの364日を通じて、産・官・民の立場を超えた新たなつながりを生み出せるような「市民参加型音楽祭」のコンセプトを提案した。



ソーシャルディスタンスをとって開催
2020年の「渋谷ズンチャカ！」集合写真

「おとまち」の提案に賛同した渋谷区と地元商店会とともに、実行委員会が組織立てられ、渋谷の街をキャンパスに見立てた生涯学習事業を展開する地元NPO「シブヤ大学」の協力を得ながら、2014年にプレイベントを宮下公園にて開催。約5000人が集まった。このイベントを見た参加者や口コミで聞いた市民の中から、翌年2015年に有志のボランティア“チーム・ズンチャカ！”が結成され、少しずつ当初描いていた、参加型音楽祭の礎が出来上がってきた。

実質7回目を迎えた2020年、このプロジェクトに参加した有志ボランティアの人数は、当日スタッフを入れて延べ700人を超えるまでに成長した。日本全国に数多くある市民主体の音楽祭が3年以上継続することが困難といわれるなか、「渋谷ズンチャカ！」が継続できている鍵としては、市民の有志ボランティアの主体性を最大限に尊重してそれを行政や企業がサポートしていくこと、地元商店会や区議会議員、企業などのキーパーソンの共感を得て成長していること、ステークホルダー同士の新たな交流の場を「おとまち」がハブとなって設けていることが挙げられる。

桑原前区長の想いを継いだ、現在の渋谷区長・長谷部健氏はこのように「渋谷ズンチャカ！」への期待を語っている。

「渋谷はクリエイティブシティだと思っています。常に何かが行われている、常に情報を発信している街。モラルやルールを守ることが前提ですが、何かをしたい人がしたいことをできる街。渋谷をそんな街にしたいですね。渋谷ズンチャカ！では、それが実現できたように思います。」

4 . With コロナ時代における「おとまち」の今後

未曾有の感染症拡大という局面において、「おとまち」も大きな影響を受けている。リアルの中で、多くの人が集まり密になって音楽を共有することが難しい状況のなか、「かしわドラムサクルファシリテーター育成講座」ではオンラインを活用した講座展開に挑戦した。「渋谷ズンチャカ！」では、開催エリアを縮小し、屋外会場で検温・手指消毒・マスク着用・ソーシャルディスタンスの徹底などを呼びかけて、渋谷という大都会で感染者を出さずに安心・安全な音楽祭を無事開催した。

このような状況においても、根底には音楽には「人を動かす力」があり、そして、その楽しさを求める人の輪は広がり、その輪の中には、音楽を通じて街に関心をもち、自分ごととして捉える市民の姿があった。



オンラインで行われた「かしわドラムサークル
ファシリテーター育成講座」の様子

オンラインを活用することによって、物理的な距離が越えられる利点を活かせば、今まで以上に全国各地での活動も視野に入ってくる。「おとまち」はこれからも音楽を通じて、関わる人の新しい「居場所」をつくる活動を全国で展開していく。

参考 URL

株式会社ヤマハミュージックジャパン おとまち公式 WEB サイト：

<https://jp.yamaha.com/sp/otomachi/>

柏市社会福祉協議会公式 WEB サイト：

<http://kashiwa-shakyo.com/>

渋谷ズンチャカ！公式 WEB サイト：

<https://shibuya-zunchaka.com/>